

岡田直俊
(豊川市立 八南小学校)

A study on Francis W. Parker and the way of being faculty meeting
at the Chicago Institute

Naotoshi OKADA
(Hachinan Elementary school)

I はじめに

生活科や総合的な学習の時間（以下、総合的学習と称する）について、永野は子どもの思いや願いの実現に向けた学習活動を展開し、その学習過程の中で資質・能力の育成を図るという特性から、生活科・総合的学習の校内研修は、これらが学校教育目標や学校の教育課程全体においてどのような位置付けに、その役割が何であり、何が重要なかを理解することが欠かせないとしている¹。また猪股は、学校長に対して、総合的学習の「教育的意義や教育課程における位置付けなどを踏まえながら、自校のビジョンを全職員に説明するとともに、その実践意欲を高め、実施に向けて校内組織を整えていかなければならない」²と述べている。このように、生活科・総合的学習が学校教育においてどのように位置付けられているかを校内で共有することは重要である。

しかし一方で、総合的学習では他者が作成した単元計画に沿って授業をすることを許さないために、「教師にとって負担感を増大させたり、授業に対する苦手意識を植え付けたりすることにつながっていたと思われる」³と加藤が指摘するように、学校独自のカリキュラムを考える際、授業を行う教師自身の裁量が大きくなるために、総合的学習の授業に負担を感じたり、苦手意識をもったりする教師も少なからずいると考えられる。

このような教師の困り感を解決するために、どのような力量形成、校内研修を行えばよいのだろうか。そこで筆者が着目したのが 19 世紀後半にアメリカで活躍した教育者フランシス・W・パーカー (Francis W. Parker) である。

中野によれば、生活科・総合的学習の主要な源流が、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて欧米を中心に展開された新教育運動だとされている⁴。特にアメリカで新教育を主導した人物の一人が、パーカーである。デューイ (John Dewey) が実験学校を運営していた時期に、パーカーも私立の学校の運営を始めており、パーカーはデューイによって「新教育運動の父」⁵と評された人物でもある。

中野は、同じくアメリカで新教育を主導した人物の一人であるデューイと彼が設立した実験学校から、今回の問題に示唆を得ている。中野は、デューイ実験学校の教師レポートおよび教師レポートの実践例とそれに基づいた教師会議から、その意義と役割を論じ、教師の力量形成と校内研修のあり方について提言をしているのである⁶。そして、デューイ実験学校の実践から学べることとして独自のカリキュラムを創造する教師の資質・能力の育成のために、累積的なデータや情報の蓄積、それに基づく教師の話し合いを現在の学校においても積極的に取り入れ実践する必要があることと、それを学校全体で行うことが肝要であると述べている⁷。

では、なぜ筆者はパーカーに着目したのか。その理由は、パーカーがデューイよりも前から教師会議に取り組んでいたためである。

角野はパーカーの教授論に教育関係論的視点からアプローチし、パーカーの教育関係における特質を述べているが、その一つとして、教師の研究集団をつくったことを挙げている。角野によれば、パーカーが教育長を勤めたクインシー時代から教師の研究集団は存在し、定期的な教師会議⁸を開き、教師間で

教授法を話し合っていた。その後の「クック師範学校」(Cook County Normal School)でも、学年やクラスに応じた指導計画。授業計画を全職員で何度も吟味していたとされる⁹。

ここでパーカーの来歴について確認しておこう。パーカーは、1837年にニューハンプシャー州で生まれ、16歳で教壇に立った。南北戦争への従軍後、1872年から3年間ドイツへ留学に行く。留学を終えてアメリカに帰ってくると、クインシー市の教育長を勤めた。先述したクインシー時代とはこのときのことである。ここでパーカーはこれまでのアメリカで行われてきた読み書きを中心とする伝統的なカリキュラムに対して、全く新たな教育を推進し、全国から注目を集めた。1883年にはクック郡師範学校(後のシカゴ師範学校である。)の校長に就任し、附属の小学校、幼稚園を実験学校として、新教育の実践を指導した。1899年には、「シカゴ師範学校」(Chicago Normal School)を辞め、シカゴの篤志家であるブレイン夫人から協力を得て、幼稚園から高校までの附属学校を有する私立の学校「シカゴ学院」(the Chicago Institute)を設立した。このシカゴ学院は1900年に開校するが、シカゴ大学の教育学部新設に伴い、たった1年でシカゴ大学の附属小学校として合併することになる¹⁰。ブレイン夫人から再び協力を得たパーカーは「パーカースクール」(the Parker School)を設立するも、1902年に亡くなってしまった。

倉沢によれば、パーカーのカリキュラム思想は1875年のクインシー時代から1880年頃のクック師範学校の前半までを第一期、クック師範学校の後半(1880年代中頃)から1899年のシカゴ師範学校を退くまでを第二期、1899年以降の晩年期であり、私立学校を設立して自由に教育を展開しようとした時期を第三期としている¹¹。そして、この第三期には「パーカーの児童中心の立場はいよいよ明瞭に展開され、経験カリキュラムの理論的基礎も一段と深まり、ついには殆んどデューイに近い新教育の理論水中に到達する」¹²とされている。また、高田はパーカーの主な教育思想であった中心統合法の形成過程を①模索、②萌芽、③確立、④発展と分け、パーカーの主な教育思想が徐々に形成されていく過程を描いている¹³。

これらの研究を踏まえると、中心統合法をはじめ、パーカーの教育思想の諸々は晩年になるにつれ発展していったものであると考えられる。つまり、教師会議の内容や方法についても少しずつ修正を加えていったと言える。これは、パーカーに限ったことではない。中野の研究の中でもデューイが教師会議のあり方に修正を加えている様子が見られる¹⁴。パーカーの晩年の教師会議の様子こそクインシー時代から修正を重ねた成果としての姿であり、デューイを越える蓄積が含むものであると言える。

以上のことから、本研究では晩年におけるパーカーの教師会議の考え方とシカゴ学院における教師会議の様子を分析し、今日の我が国における教師の力量形成や校内研修のあり方について学ぶべきいくつかの点を提言することを目的とする。

II パーカーの教師会議の考え方

(1) シカゴ師範学校時代における考え方

本節では、パーカーの教師会議への考え方について、シカゴ師範学校のものとしカゴ大学の教育学部長に就任した頃のものを取り上げ、パーカーの指導する学校の教師会議の特徴について考察する。

パーカーはシカゴ師範学校を離れた直後である1899年の夏に市の教育長へ向けて、クック師範学校ならびにシカゴ師範学校時代の活動を説明する文章を書いている。その中に、教師会議について言及されている。パーカーはシカゴ師範学校時代の教師会議について、以下のように述べる。

私たちは学校組織上の目の前の緊急の課題のいくつかを解決しようと決意し、熱意と真剣さをもって取り組んできた。一週間に一度、2～3時間、私たちは毎日の教授(teaching)と訓練で生じた課題について議論した。全ての教師は自分の教授とその理由を説明し、自分の観察の結果得られた計画や教授の全てを批判的に捉えることを求められた。また、学校をよりよくする意見として提案や計画、工夫を尋ねられた。印刷設備が整うと、教師たちは教師会議で研究したり議論したりするために、作成したシラバスを印刷して配った。

定期的な教師会議だけでなかった。学科長は

多くの会議を開き、学年の教師は日々の仕事の課題について彼ら同士で集まって議論した。

各教師は自分の教科の本質的な価値と、他の教科との関連を全教員や学校全体に広めることが期待され、彼の専門が残りの仕事の価値をどう高めるかを発見することを期待された¹⁵。

このことから、シカゴ師範学校時代の教師会議の目的や内容、開催回数などが分かるが、この教師会議の目的は、各教師の力量形成にあったと考えられる。週に一回の定期的な教師会議では、日々の教育活動について、理由を含めて説明することや、自分を批判的に捉えることが要求されている。また、不定期に行われる学年の会議では、自分の専門が他の教科とどのように関連し、どのように成果につながるのかを説明しなければいけなかった。少なくとも週に一回は行われるこれらの活動を通して、教師は自分の教育活動を振り返ったり、次の計画を見直したりすることができたと考えられる。

加えて、自分の専門と他教科との関連を教師に問うことは、パーカーの中心統合法を学校の教師に伝えることに繋がっている。パーカーは創造の真理を追求するための最短の道筋を表し、方向をさし示すものとしての中心教科¹⁶と、中心教科での教育的な思考を発達させる教科として形式教科を置いている¹⁷。教師が考えてくる自分の専門と他教科との関連はまさにこの中心教科とその関連を考えることにならるのである、このように教師会議を通して、校内の教師が自身の中心統合法を実践できるように促していたと考えられる。

なぜパーカーは教師会議でこのような内容の議論を求めたのか。それは、この時代の教師が抱えていた課題に関係する。パーカーは、この文書の中で次のように述べている。

もし師範学校の教師が多くの暗唱 (recitations) を負わされ、様々な教科を教えざるをえなくなっているならば、彼のエネルギーは過度に働かされ、彼の研究と調査の時間は失われ、彼の仕事は全ての方向において弱っている¹⁸。

教師会議において、それぞれの専門と他教科との関連を共有し合あうことは、それぞれの教科の教材研究になるということである。また、それぞれの教育活動の共有は、他の教師にとって良いところを自分の実践に持ち込むことができるよい機会になるだろう。つまり、教師の仕事を効率化するための一つの策でもあったと言える。

このように、パーカーが指導したシカゴ師範学校の教師会議から、その特徴として次の2点が挙げられる。1点目は日々の自分の実践を振り返り、共有することである。教育活動の理由の説明や批判的な視点で捉え直すことが要求されたことは、自分の実践を客観的に分析することに繋がるだろう。2つ目は自分の専門と他教科との関連を考えることである。自身の専門教科がシカゴ師範学校の教育とどう結びつくかに気づくのと同時に、教師会議で共有することにより、他教科を専門にもつ教師がその教科を学ぶことができる機会にもなる。これは、パーカーの中心統合法における教科の関連が教師会議によって実践に移されえたことを示唆するとと言える。

(2) シカゴ大学時代における考え方

1901年にシカゴ大学の初代教育学部長に就任したパーカーだが、同時にパーカーが設立したシカゴ学院はシカゴ大学に組み込まれ、附属学校もシカゴ大学の附属学校になる。もともとシカゴ大学を母体として活動していたデューイ・スクールがあり、シカゴ学院の編入をめぐって議論が交わされたが、結局、デューイ・スクールを教育学科と大学院の実験学校とし、シカゴ学院を教員養成のための実習学校とすることで双方を存続させることにまとまった¹⁹。

このシカゴ大学時代に、パーカーは元シカゴ学院の実習学校でも教師たちと実践を重ねた。そして、機関誌として“*The Elementary School Teacher and the Course of Study*”を毎月発刊していた。

その中で、パーカーは実習学校の教師について次のように述べている。

全教師、学科、学年での会議における個人的な研究では、教師は全ての理論と彼らの研究と訓練で発見された仮定の真実について議論する。教授において、無益なものや役に立たないも

のを除くように努め、教育的な自己活動においてより効率的なものを取り入れるように努める。この仕組みは教育における真理を求めると個人成長への真理の個人的な適用で構成される。それぞれの教師は研究と適用において完璧に自由である。そのような自由は表面上の画一よりもっと深いところにある統一に到達する唯一の方法である²⁰。

このことからパーカーが教師陣とどのような関係を築いていたかが分かる。シカゴ大学の実習学校では、教師はあらゆる理論を教師陣で議論し、実践に適用するのは各教師にゆだねられた。しかし、それは自由奔放に実践に取り組んでよいのではなく、そこには「教育の真理と個人の発達の真理を探究すること」を目的とし、それに合う教育方法を様々に行う自由があったということである。このように、シカゴ大学の実習学校では、教育の目的がきちんと共有されたうえで、教師の自由な活動を行う環境があり、そのフィードバックの機関として教師会議が用いられていたことが分かる。

上述したように中野はデューイ実験学校において教師の知的自由が認められていたことを明らかにしたが²¹、パーカーが指導した学校においても同様に、教師が新しいアイデアを試す自由が与えられていたと言える。

これまで、パーカーが1899年に書いたシカゴ師範学校時代の教師会議への考え方と、1901年に書いたシカゴ大学時代の教師会議への考え方を取り上げ、その特徴について検討してきた。その結果、パーカーが指導した学校では、次の特徴があることが明らかとなった。一つ目は、教師が様々なアイデアを議論し、実践する自由が認められていたことである。ただし、この自由はあくまで「教育の真理と個人の発達の真理を探究する」という目的に基づくものであった。二つ目は、教師会議において、自分の実践の理由を説明したり、批判的に捉え直したりすることが求められたことである。三つ目は、自分の専門と他教科との関連について説明することが求められたことである。

では、これらの特徴のもと、実際にどのような内容が話し合われたのだろうか。

III シカゴ学院における教師会議の議題

(1) シカゴ学院開校前の教師会議

本節では、シカゴ学院の教師会議で実際に話し合われた議題について取り上げる本節で使う資料はシカゴ大学のレゲンステイン (Regenstein) 図書館のスペシャルコレクションに保管されているものである。毎週行われていたとされる教師会議の資料はほとんど残っていなかったが、残っていた資料から、その実際について考察を加える。

資料にある中で最も古いものは1900年8月13日から17日まで開かれた教師会議に用いられたメモである。8月13日から17日までには以下の内容で教師会議が開かれている。

月曜日、8月13日

主題：中心教科の相関、ライス先生の論文、30分。バーバー先生の論文、30分。議論。

火曜日、8月14日

主題：数学の教育的価値、マイヤーズ先生の論文、40分。ヴァン・ホーセン先生の論文、20分。議論。

水曜日、8月15日

主題：芸術、芸術と工芸、それらの教育への適用、ダンカン先生の論文、40分。カーリー先生の論文、20分。議論。

木曜日：8月16日

主題：言語：ラテン語とギリシャ語、グールド先生、30分。

ドイツ語、ベニグヌス先生、20分。

英語、フリント先生、20分。

フランス語、アシュリーマン先生、

20分。

議論。

金曜日、8月17日

主題：身体的な文化、クロフォード先生の論文、40分。クロー先生、20分。議論²²。

この一週間は、教育活動に踏み込んだ内容になっている。各教科の価値や他教科との関連が話し合われていることが分かり、シカゴ師範学校時代でパーカーが述べていた話し合いの内容からは大きく変わらないことが分かる。この資料からはどのような内

容で話し合いをしたかは分からないが、シカゴ学院が開校する直前であったことを踏まえると、シカゴ学院における各教科の価値やカリキュラムについて話し合ったと考えられるだろう。

教師会議の資料ではないが、シカゴ学院が学部で教育課程を作成したことが分かる手紙が残されている。シカゴ学院の科学と自然学習 (Nature Study) 部門の部門長であったウィルバー・S・ジャックマン (Wilbur S. Jackman) が地理科の教員であるベイバー (Zonia Barber) とアトウッド (Wallance W. Atwood), 歴史科の教員であったライス (Emily J. Rice) とミッチェル (Clara I. Mitchell) に以下の内容で手紙を送っている。

科学部が今年のコース・オブ・スタディを作るのを手助けするために、この紙の裏面に、あなたのクラスで指導が必要な化学作業の特別なポイントを示してもらえませんか。特に科学と物理学の分野で考えてください²³。

この手紙からは、シカゴ学院で各教科のコース・オブ・スタディを作成しているのが、それぞれの科目の部門全体もしくは部門長になっている教師たちであったことがわかる。ここで興味深いのは同じ科学系のバーバーやアトウッドだけでなく、歴史の教員であったライスやミッチェルにも意見を聞いている点である。シカゴ師範学校時代から他教科との関連を聞いているからこそ、今回このような依頼ができたと言える。つまり、教師会議には教員のコミュニケーションを促す作用もあると考えられる。

(2) シカゴ学院開校後の教師会議

シカゴ学院は1900年10月1日に開校した。次の議題は開校してから間もない10月10日の教師会議の議題である。

1. 教師団のランク
 - (a) 機能
 - (b) 仕事の質
2. 労働の分類
 - (a) 調和
3. 委員会の機能

4. 個人の記録による委員会の任命
5. 生徒の個々人の注意
 - (a) 欠点への配慮
6. 教具
 - (a) 万年筆と紙
 - (b) 生徒に何を買うべきか
 - (c) 図書室の使い方
7. コース・オブ・スタディとその効率の良い使い方
 - (a) シカゴ学院の教授におけるコースの使い方
 - (b) 学院外での使い方
 - (c) 予約購読の獲得
8. 計画
 - (a) 午後の仕事、どのように計画すべきか
9. 公開授業
10. 学院の拡張²⁴

上記のメモから分かるように、話し合われた内容は学校の機構に関することや、教具、機関誌の使い方等である。これらの内容を、パーカーを含む一部の教師のみの話し合いで決めたのでは、シカゴ学院の教師たち全員が話し合いで決めていたことが分かる。

教師会議において、教育活動だけでなく、このような議論をパーカーが求めたのは、パーカーのもつ理想の学校への考え方が影響している。パーカーは「理想の学校は理想の共同体である。理想の社会とは、民主主義である。」²⁵と述べている。さらに、その中の教師の役割について「教師は学校共同体の模範市民である。」²⁶と述べている。つまり、これから開かれるシカゴ学院を理想の共同体すなわち民主主義の共同体にし、教師にもその模範であれと望むパーカーにとって、学校に関わる議論には教師の参加が必須であり、この教師会議であっても民主主義的な場であることを求めたのである。

開校してから数か月が経った1901年1月31日の教師会議の資料の発案者はパーカーであり、内容は以下の通りである。

議論

教授における目的は何か。

その目的は明確でよいと定義されているか、そ

れとも漠然としているか。
教授において一つ以上の目的を持っているか。
何を教えているか。
教えているときを知っているか。
教えた結果で分かるか。
最大の注意と心配をもって、子どもの身体、精神、魂の成長を見る習慣があるか。
教える上であなたの最大の欠点は何か。
教師としてのあなたの仕事において、あなたが与えている最大の激励は何か。
「義に飢え渴く者は幸いである」という文章の説明。
教授の仕事において最も助けになることは何か。
教えることを学ぶ上で最も大きな障害は何か²⁷。

この議題からは教育目的、教育内容の問い直しや子どもの評価への言及などが見られる。1月31日は、すでにシカゴ学院が開校しており、秋のクォーター(Quarter)を終え、冬のクォーターが始まって1か月が経つ頃である。なぜパーカーがこの時期に、学校教育の根幹となる教育目的などを議題にしたかは分からないが、教師会議の中で、教育思想に関わる内容を議論していることは特筆に値する。このように教育目的の議論を経ることで、上述したシカゴ大学の実習学校についてパーカーが述べたように、共通の目的のもと、教師に自由を認める環境を作ることができたと考えられる。

ジャックマンは1901年6月13日に「自然学習の基礎としての風景」というテーマで教師会議の議題を挙げている。ここでは、これまでの資料と異なり、疑問文や一文の議題が多く書いてあるわけではなく、5章に分かれて構成され、ある程度の量の文章になっている。以下、内容について整理していく。1章は「すべての経験の背景となる自然」²⁸として、教育において自然を取り扱う意義について述べている。ここでは、教育界の産業への関心が高まり、自然への関心がなくなっていることに対して、自然が子どもの興味を得られることを説明している。第2章は「変化という現象の中にある自然に対する興味の本質的な源」²⁹として、動的な自然の変化が子どもの興味を引くことを説明している。第3章は「さまざまな変化」³⁰として、昼行性や季節性など、自然に

おける様々な変化を説明している。第4章は「さまざまな変化に対する関心の高まり」³¹として、これらの変化が子どものどんな興味を引き出すかを説明している。第5章は「子どもの興味を引きつけ、自然への関心を高め続けるための、生物としての景観に対する考え方を保持する必要がある風景の理想」³²として、絵や数学的な活動を取り入れながら、風景への興味を続けていくことを主張している。

ジャックマンのこの資料は、自然学習の意義を表しているだけでなく、子どもの興味が何にあるかということや当時の教育の課題、他教科との関連まで考えて作られている。これはシカゴ師範学校で行われた教師会議の流れを引き継ぎ、子ども研究、他教科との関連などを踏まえて計画を立て、教師会議で提案したということが分かる。

最後に、スペシャルコレクションの資料ではないが、シカゴ学院が毎月出していた機関紙『コース・オブ・スタディ (the Course of Study)』から、パーカーの提案を取り上げる。

パーカーは「生徒の研究と記録のための計画の記録」という題名で記事を載せているが、これは、子どもの成長を捉えるためにパーカーが作成した用紙を説明する文章である。その中に次のような一文が載っている。「この用紙は単なる暫定的なものである。教員全員の考えと議論が、可能な限り完璧に近い用紙の考案に生かされることになる。」³³つまり、パーカーは自分の考えも教員会議の議場に載せ、教員同士でよりよくなるように話し合おうとしたのである。それは決して上意下達の学校経営ではなく、教師も学校長であるパーカーも同じ共同体の一員として捉え、同じ目的をもった仲間として、よりよい教育を目指して議論し合う関係性を求めたと言える。

これまで、シカゴ学院の教師会議の議題について取り上げてきた。その結果、シカゴ師範学校からの流れを引き継いでいることが分かった。またそれに加え、シカゴ学院では理想の共同体である学校と理想のモデル市民としての教師を目指し、パーカーも教員も同じ立場で話し合う場としての教師会議が設定されていたことが分かった。

IV. おわりに

最後にパーカーの教師会議への考え方と、その実

際の議題から、本日の日本における教師の力量形成と校内研修のあり方についてどのような示唆が得られるか論じる。

(1) 学校教育目標を軸にした自由な実践の環境づくり

シカゴ学院では「教育の真理と個人の発達の真理を探究すること」という目的のもと、教師が自由に教材や方法を試すことができた。現代に置き換えるなら、この目的の部分は学校教育目標にあたると言える。学校で共通しているこの教育目標に向けて、教材や方法は自由に試すことのできる環境や雰囲気を作ることが大切である。特に総合的学習においては、学校独自で特色あるカリキュラムを組むことが可能である。自由裁量が大きいためこそ、学年や教員同士で情報交換しながら、自由に教材や教育方法を試す場を作ること、若手教員の挑戦することへのハードルを下げ、前向きに取り組みやすい環境を作ることができるのである。

(2) 教師の実践の振り返りと共有の場の設定

実践者としての引き出しが少ない若手教員にとって、自由裁量が大きいため、総合的学習は敬遠されがちである。そこで、積極的に実践を振り返り、共有できる場を設定することが大切である。日々の業務に追われて、自分の実践を振り返る場を作るとは難しいかもしれないが、自分の実践を客観的に振り返る機会を作ること、確実に自分の中で経験として蓄積されるだろう。特に、なぜそのような教育活動にしたのかという理由の振り返りや、自分の実践を批判的に見直す機会を設けることで、実践の振り返りはより客観的になる。また、その振り返りを他の教員と共有し、異なる視点からも意見をもらうことができれば、より客観的に、多角的に自分の実践を見つめ直すことができる。他の教員から同様に振り返りを聞くことで、自分の実践に生かせるヒントをもらえることにもつながるのである。特に総合的学習に苦手意識を感じる教員に対して、現時点での実践を振り返り、先輩教師に共有する場を作ること、単元の軌道修正も可能になる。

(3) 民主主義的な会議における教育目標等の議論

本節の(1)において、学校教育目標に向けた自由な実践と主張したが、そもそもの学校教育目標を教員全員で設定することが重要であろう。それは、

その後実践を行うのが担任をもつ教師や専科をもつ教師であり、目標設定の段階から議論することで、目指す子どもの姿と現状の問題点がより明確になるためである。また、学校教育目標の議論から、その後は6年間の目標が決まっていく。入学から卒業までに子どものどのような姿を期待するのかを設定することで、自分が受け持つ学年の目標や取り組むべき教育活動が明確になる。なお、その際には自由闊達に意見が言える場の雰囲気が大切である。学校内の教師の同意形成を図るためにも、意思表示をすることは必要である。校長をはじめ管理職の教師には自由に意見が言えるための話し合いの土台を作ること求められる。

本研究では、シカゴ学院はじめパーカーが指導した学校では教師会議で実際にどのような話がされ、それが実践にどのように生かされたのかについて検討することができなかつた。今後、その解明をすることで、教師の力量形成と校内研修のあり方への更なる提言につながると考える。

【引用・参考文献】

- 1 永野理英子「生活科・総合的学習を核とした校内研修」日本生活科・総合的学習教育学会編『生活科・総合的学習辞典』、溪水社、2020年、pp.168-169。
- 2 猪股亮文「総合的学習における校長の役割と校内体制」日本生活科・総合的学習教育学会編『生活科・総合的学習辞典』、溪水社、2020年、p.102。
- 3 加藤智「総合的な学習の時間における単元計画の作成」中野真志・加藤智編著『資質・能力時代の総合的な学習の時間—知性と社会性と情動のパースペクティブ』、三恵社、2023年、p.169。
- 4 中野真志「欧米における新教育運動の思想と歴史」日本生活科・総合的学習教育学会編『生活科・総合的学習辞典』、溪水社、2020年、pp.6-7。
- 5 John Dewey. "How Much Freedom in New York," 1930, Jo A. Boydston (Ed.), *The Later works of John Dewey: 1929-1930*, Vol.5, Southern Illinois University Press, 2008, p.320.
- 6 中野真志「デューイ実験学校における教師レポート—教師レポートに基づく教師会議—」日本生活科・総合的学習教育学会『せいかつか&そうごう』第12号、2005、pp.60-67。
- 7 同論文、p.67。
- 8 角野は教員会議という言葉を用いているが、ここでは語句の統一のために教師会議として表現する。
- 9 角野幸代「フランシス・W・パーカーの教授理論

- に関する研究—教育関係論的視点からみるパーカー教授論の新局面—」湊川短期大学『湊川短期大学紀要』第44集, 2008, p.56。
- 10 なお、倉沢によれば、このときパーカーはシカゴ大学の初代教育学部長に就任している（倉沢剛『米国カリキュラム研究史』風間書房, 1985, p.120。）
- 11 同書, pp.119-121。
- 12 同書, P.131。
- 13 高田喜久司「F.W.パーカー教授学における中心統合法理論の形成過程」教育方法学会『教育方法学研究』第4巻, 1979, p.35。
- 14 中野, 同論文, pp.65-66。
- 15 Francis. W. Parker, “An account of the work the Cook County and Chicago Normal School from 1883 to 1899.” *The Course of Study*, vol.2, No.10, The University of Chicago Press, 1902, p.754.
- 16 Francis Wayland Parker, *Talk on Pedagogics: An Outline of the Theory of Concentration*, E.L.Kellogg & Co, 1894, p.26.
- 17 Francis Wayland Parker, “The Plan and Purpose of the Chicago Institute,” *The Course of Study*, vol.1, No.1, The University of Chicago Press, 1900, pp.13-14.
- 18 Francis Wayland Parker,(1902) op, cit., p.755.
- 19 このあたりの流れについては、松村の『シカゴの新学校』（松村, 前掲書, pp.34-35）で詳しく述べられている。
- 20 Francis Wayland Parker, ”The Elementary School Teacher and The Course of Study,” *The Course of Study*, vol.2, No.2, The University of Chicago Press, 1901, pp.99-100.
- 21 中野, 同論文, p.67.
- 22 Francis Wayland Parker, “Faculty conference,” *Chicago Institute Records*, Box.1, Folder.2, the University of Chicago Library, 1900.
- 23 Wilbur S. Jackman, *Chicago Institute Records*, Box.1, Folder.2, the University of Chicago Library, 1900.
- 24 製作者不明, “Note of Faculty Meeting October 10th,” *Chicago Institute Records*, Box.1, Folder.2, the University of Chicago Library, 1900.
- 25 Francis Wayland Parker, “The Plan and Purpose of the Chicago Institute,” *The Course of Study*, vol.1, No.1, The University of Chicago Press, 1900, p.10.
- 26 Francis Wayland Parker, “Unity in Ideal and Motive Syllabus for Faculty Discussion,” *The Course of Study*, vol.1, No.3, The University of Chicago Press, 1900, p.189.
- 27 Francis Wayland Parker, “To the Faculty,” *Chicago Institute Records*, Box.1, Folder.2, the University of Chicago Library, 1901.
- 28 Wilbur S. Jackman, “the Landscape as a Basis for Nature Study,” *Chicago Institute Records*, Box.1, Folder.2, the University of Chicago Library, 1901, pp.1.
- 29 Ibid, p.1.
- 30 Ibid, p.2.
- 31 Ibid, p.2.
- 32 Ibid, p.2.
- 33 Francis Wayland Parker, “Notes on Plan for the Study and Record of Pupils,” *The Course of Study*, vol.1, No.10, The University of Chicago Press, 1901, p.861.